

春夫偏論

田中克己

先師佐藤春夫はみづから「自分は勿論支那学者ではなく所謂支那通でもなく、また支那学研究者でさへもない。もし自分に何か強ひて支那の二字のついた肩書をつける必要があると仮定したら、まあせいぜい支那趣味愛好者ぐらゐなところかも知れない。」(昭和一六年「支那雑記」の序としての「からももの因縁」といつてゐる。謙遜のやうに聞えるが、夫子自ら知るといふのがこの多情にして賢明だった詩人にして小説家、評論をもよくした文豪の真骨頂であらう。

今年先師が亡くなられて七周年、講談社の「佐藤春夫全集」一二巻が完結した。全集と銘打ったが、実はやはり

選集であつたことを門下三〇〇〇人の一人であるわたしは悲しく思ふが(日記、書翰篇だけでもつけて欲しかった)、これが機縁となつて牛山百合子女史による「佐藤春夫年表」が完成した。牛山さんは例言で未定稿と称してゐられるが、これより詳しいものはいままでなかつたので、一本をいただいたわたしは喜んで拜見した。年譜の作品(掲載誌)の最後に年月不明作品の項がある。わたしなど不勉強で、この項に一言も出来ないが、熱心な文学史の研究者が牛山さんを援けてくれると思ふ。次は著書目録。佐藤先生は同じ作品をたびたび装幀を改め(この装幀がいつも他の作品とちがつて異色あり、美しかったことは特記されるべきだ

らう)るほか、作品の組合せをかへて、別の題名で一冊とされたので、わたしなど門人兼愛読者はずいぶん困らせられた。過去形で困らせられたといつたが、今この稿を草する際にも困ることは同じで、先生は版を改め、本を交へるごとに多少の書き直しをなさつてゐるのである。これこそ文学の鬼として当然なのであらうが文学史としてとりあげるとき、どちらをとるべきか困難を伴ふであらう。

わたしが春夫文学にとりつかれたのは、旧制高校在学中、すなわち昭和三年以降である。なかで一等わたしをとらへたのは「ポリタイア」八号(昭和四五年六月発行)の「佐藤春夫特集」のアンケートで答へた。即ち「F・O・U」と「霧社」などである。前者はバリの街で瘋を病む可憐な青年を書き、後者は霧社事件(昭和五年)に先だつて十年の平和な霧社など台湾諸地への旅行記で、何ともけだるい話法で、しかも読者を引きつけずにはおかない。わたしは読後たちまち台湾旅行を父に申し出て、心配げに神戸まで見送つてくれた父を尻目に一万屯の高砂丸に乗込んだ。この船は日台航路専用であつたが、大東亜戦争中に沈んだかと思ふ。

余談はさておき、佐藤先生の台湾旅行は対岸の厦門^{アモイ}まで

延び、ここでの見聞に成つたのが「星」である。これが春夫作品中の代表作の一つであることは、前述「ポリタイア」誌上の諸家のアンケートその他でも古木春哉、伊藤佐喜雄、水谷清、河盛好蔵の諸氏が推薦してゐられることで証される。これら推薦者が春夫門下の中でもまた異色なのが興味がある。

わたしはしかしこの「星」は失敗作だと思ふ。著者の説によれば厦門で聞いた「陳三公子王五娘子」の民話が主となつてゐる由だが(「支那雜記」所収「荔鏡伝」)、「大正九年六月下旬、東熙市に誘われへ台湾及び支那福建に旅行す」。七月十日、台湾打狗湊町の齒科医院東熙市方に在つた。二十一日、厦門に渡る(牛山氏、前掲「年表」とあるから七月末に厦門で聞いた話がもととなり、翌大正一〇年三月第一稿「黄五娘」を前半として「星」を創作し(同上)、「改造」三巻一号に前半を「黄五娘」の題名でのせ、同巻三号に「星」と題して後半をのせたのであらうか。第二次大戦中、廃刊となつた「改造」は戦後も再刊されず、旧号を閲するいとまもないので牛山さんの年譜をそのままにのせておく。

わたしが「星」を先生の傑作に数へなくなつたのは、先

生の作にひかれて台湾へ旅行したあとである。皮肉なもので、わたしは台湾旅行中にいつのまにか文学より歴史が好きになつてゐた。帰つて台湾に関係の深い鄭成功（これを祭つた台南の開山神社といふのにわたしは参拝した）を秋ごろから勉強してゐるうちに、わたしは「星」をあまり好かなくなつたのである。

「改造」の初稿は検するに暇がないといつたが、この小説は大正一〇年新潮社発行の「幻燈」の巻頭に収められてゐる。ご承知の人も多からうが、簡単に紹介すると「星」は第一折、第二折と数へて第五折で終りとなつてゐる。各折とも短いので、「幻燈」では七八ページとなつてゐるから、「田園の憂鬱」、「都会の憂鬱」などよりずっと短い。まづ泉州城に近い英内の豪家陳氏に三人の息子があり、三人目が陳三と呼ばれてゐる（最後まで諱や字を明らかにしないのが民話の特徴である）。陳三は星に願つていふ「私に世の中で一番美しい娘を」妻に、「その妻の腹に宿つて出来る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい」と。次兄はこれを聞くと嘲る。その嘲つた次兄は志を上げて両広総督（広東省と広西省の地方行政軍事をすべる大官）となる。早く家を出て両広巡察使（前述二省の監察

官）をつとめてゐる長兄の手びきである（民話がまちがつたか、春夫の聞きちがひか、兄弟が同じ地方の大官になることは汚職を避けるため、明清時代には許されてゐない）。陳三は次兄を見送りに潮州（広東省）まで来て、別れを告げたあと城内を見物し、世にも美しい娘を見そめる。これを他人にきくと黄五娘と名を教へられ、その投げすてた荔枝の実をふところにし、計を練つた陳三は鏡磨きになりすまし、黄家に入りこんだが、鏡を磨きをへてとりおとしわつてしまふ。主人にわびて身の代でつぐなひをするといひ、黄家にとどまつた陳三は、黄五娘と身なし児でこの家に養はれてゐる洪益春から目をつけられる。陳三は益春を通じて、自分の身分と願ひとを黄五娘に伝えてもらひ、その房に入りこむ。二人をつれて陳三は黄家を逃げ出し城外二〇〇里の漳州（福建省）近くまで来て、悪い兵卒たちに捕へられ牢屋に投げこまれる。この時、牢の巡視に來たのが陳三の長兄である。乱れてゐるといふ噂の最も高いこの閩海（両広巡察使の権限外である）へ突然來たのだが、牢内から陳三に「兄さん」と呼ばれ、少年の時に別れて、久しい二人は互ひに兄弟であることを識る。

陳三はかくて二人の女と出牢して、潮州の黄家へもゆ

き、正式の結婚の許しを得て、しあはせにくらす（どこで何をしてかは佐藤先生は書かない）。そのうちに益春は懐妊し、黄五娘の方は嫉妬に身を焼く。彼女は一計を案じ、書き置きを床におく。庭の井戸へ身を投げるといふのがそれである。驚いて陳三が井戸ぎはへゆくと石だたみに赤い屍があり、片方は井戸に浮いてゐる。陳三はそれを見てゐるうちによるめて井戸におちる。物影にかくれてゐた黄五娘は益春に遺書をのこして井戸にとびこむ。二人は同じ穴に埋められ、墓辺には相思子が植ゑられる。

これが第四折で一応きりがついてゐるやうに思ふが、春夫はあと一〇折をかきくはへてゐる。ただし「荔鏡伝」といふのがあつて、同名の春夫のエッセー（その初掲載誌は牛山さんの著にも見えないで、「支那雜記」に見えてゐる）では、

「……拙作の短篇に「星」といふのがあるが、荔鏡伝はその題名から考へても巻頭の挿絵から見ても、僕が廈門で聞いて来た陳三公子王五娘子の佳話を同じく取材したものらしいといふので、三、四年前、友人増田渉がどこかで見つけて来たと僕に贈つてくれたのがこの本である（中略）。

拙稿「星」は廈門地方の口碑によつたもので荔鏡伝とは

直接の関係はない。しかし自分の聞いた口伝は荔鏡伝と根源を一つにしたものであらうと想像するに難くない。但、それに類する事実があつたかどうかは疑はしい。但、陳三五娘のロオマンズはこの地方で一時頗るアタツタ芝居であつたといふ事實は、伊能嘉矩の台湾文化志によつて明らかにされる。」

といひ、「台湾文化志」のその箇処を引いてゐるが、これが「廈門志」から引いてゐることも明らかなので、道光年間の周凱「廈門志」を検すると卷一五風俗記に

廈門前有「荔鏡伝」、演泉人陳三誘潮婦王五娘私奔事、姪詞醜態、窮形尽相、婦女觀者如堵、遂多越礼私逃之案、前署同知薛凝度禁止之。

といふ箇処があり、薛凝度は同書卷一〇職官表では嘉慶二〇年（一八一五年）の署同知とある。儒教的見地から私奔（自由結婚）をそそる作と考へて禁止したのであらう。春夫はそんな見地をもたないから、このテーマを非常に好んで作りかへたのだと思ふが、問題は「荔鏡伝」の陳三が潮州（広東省、これなら長兄の巡察は可能である）の女王五娘をかどはかしたことにあるのでなく、後半に王五娘（春夫では黄五娘）との恋愛の手引きをした洪益春といふ婢が

荔鏡伝でも重い地位を占めてゐるかどうかである。春夫の「星」の第四五折以下は夫と五娘（女主人）とを失つた益春が男児を産み、両広総督にまでなつてゐる赤児の伯父もこのころには全く関係がなくなり、赤児は母の家を継いで、洪承疇、字を亨九といつた。彼は万曆の中ごろに進士となり、その母はこの子が「後に世の中で一番えらい人になる」ことを決して疑はないで死んだ（第四九折）。

この春夫の設定、もしくは聞き書をわたしは清朝史専攻者として大変に興味ぶかく感じとつた。

まづ春夫先生が簡単に記された母の家を嗣ぐことが、実は日本とちがつて中国では異例のことなのである。父の死後に生れたとしても、その実子であることが認定されれば、父の家を断たないために、母の嫡庶を問はず父の姓を継ぐのが当然である。春夫先生も愛して読まれた「今古奇観」（先生はいつだったか、わたしとこの本の話をして「田中君ほどの話が好きかね」とお尋ねになつたので、思ひつくまゝ「十三郎五歳朝天」と申し上げたら、何もおつしやらなかつた）の「灌園叟晩逢仙女」を先生が訳されたのは牛山さんの年表では大正一一年、題は「百花村物語」で、のちには「花つくりの翁」と改められた由である。また大正

一五年にも「売花郎独占花魁」を「上々吉」（のちには「願事叶ふ」と題して訳しておいでである。わたしと同じく「今古奇観」はお好きであつたが、好みを異にする奴だとお感じになつたのだと思ふ。

また余談となつたが、実はこの「上々吉」の主人公こそ中国では珍しい他姓を名乗つた男である。莘といふ珍しい姓の家に生れた娘、瑤琴は金人（女真族）のために住み家を追はれて、江南に逃れ、花柳界に身を投じて王美娘と姓を改める。この身売と改姓とはあるひは珍しくなかつたかもしれないが、同じく戦乱で汴京から臨安に逃れた秦重は困つた父親に油屋朱十老に売られて、のちにはその養子となり朱重と名のる。しかし、恋愛に成功し財をもなしたのちは、父親にあひ秦姓に帰るのである。福建省は中国の辺僻でいくぶん趣きを異にするかとしらべてみたが、異姓の養子となり、姓を変へるのは尋常ではない。まして陳家は泉州の名家で、たとへ三男であらうとその後を断つことは稀であらう。もつとも洪承疇と同じ時代（承疇の進士及第を佐藤先生は万曆の中ごろとしておいでだが、万曆も末、四四年だつたことは諸書に明記してある）に、漢人でありながら清朝に降つて行つて定南王、平南王、靖南王と王爵

をもらふ三人は毛文龍といふ軍閥に属してゐた時、養孫として毛永詩、毛永喜、毛有傑と称したが、清朝に降つて後はそれぞれ孔有徳、尚可喜、耿仲明と本姓名に帰つてゐる。

もつと有名なのは福建省南安生れの鄭芝竜を父とし日本人を母とした鄭成功が唐王（隆武帝）から朕は女子がないのでと、朱姓を賜はりこれより国姓爺と呼ばれた例であらう。しかし成功自らが朱成功と称したことは管見では見つかからない。

洪承疇に関してはそのやうな事実はなく、父は陳三でなく、その死も順治四年であつたことが「清史」巻二八三洪承疇伝のつてゐる。母胎にあつて父の死に遭つたところか、この時の息子の官は清の招撫南方総督軍務大学士の大官で、齢も五五歳だつたので、「星」の内容とは大ちがひである。「星」の洪益春は名はともかく、洪以外の姓で（中国では同姓は結婚しない）あつたに相違ない（婢妾の場合も母は明らかでないことがあるので占つてきめるといふ）が、母の死も「清史」の洪承疇伝に見えてゐて、父におかれること五年後の順治九年五月であつたといふ。

「星」の愛読者ならびに春夫先生の門弟たちには不要のことだが、わたしは先生を通じて中国が好きになり、中国

史をも専攻したので、お礼の意味で洪承疇のことをもう少ししるしてみよう。先生は細事にこだはるとお怒りになるか、御生存中、一つもそんな話をしなかつたなと思はれるだらう。わたしもその意味で師をしたふあまり「星」をあげつらふのである。

「星」の第四九折では

その母はその子が「後に世の中で一番えらい人になる」ことを決して疑はないで死んだ。

とあるが、すでに述べたとほり、母は息子が清朝に仕へたあとで死んだ。しかも息子は明朝でも神宗、光宗、熹宗、思宗（毅宗）の四代に仕へ、思宗の代では、世間一般からも「世の中で一番えらい人」になつた。「星」の第四九折の終りには、

洪承疇は薊遼総督であつた

とあるが、もすこしくはしくいふと、崇禎一二年（一六三九）、数年四七歳で彼は対清戦の第一人者と認められ、兵部尚書兼右副都御史総督薊遼軍務といふ官に任ぜられた。

これまで総督陝西三辺といふ官で、陝西、山西、河南、湖広方面で流賊を伐つた功を認められたのだが、流賊よりさらに手強いと明朝が認めた清人の遼西進撃を防ぐのは、こ

の人を措いてないと、皇帝からも世間一般からも認められたのである。父、母はともにこの子を「世の中で一番えらい人」になつたと思つたであらう。翌年には太保の官を賜はり金四〇、緋蟒一襲を賜はつたあと、山海関を出て任地向つた。七月、彼は松山城に入つた。さらに北方の囲まれてゐる錦州城を救ふためであつたが、清の太宗は自ら大軍を率ゐて錦州をすどほりし、松山城に迫つた。十重二十重に囲まれた松山城では食糧が尽き、翌崇禎一五年六月一八日、城は落ち、洪承疇は部下の祖大樂や夏成徳に縛られて、清の太宗の面前に引き出された。

「星」の第五二折では

「(李自成は河南で)二人の王を殺して、その勢でふたたび都の方へ押し寄せて来る。李自成の軍のこの情勢を知つた時に、清と決戦をするために陣中にあつた洪承疇は気が挫けた。(中略)寧ろ、この優れた軍勢を従へてゐる清に一たん降つて、仕方がなければ大明の半分を清に与へやうとも、かうして国が全く亡びるよりは未しもいい。」と考へて降伏したといふが、実は軍敗れて降つたので、流賊李自成の軍が北京を陥れ、思宗が自殺するのはその翌年である。清の礼親王昭璉の隨筆「嘯亭雜録」は著者が嘉慶

(一七九六〜一八二〇)の人であつて、伝聞を記した箇所が多いので、信用が置けないが、洪承疇のことは巻一に「用洪文襄」、巻八に「洪文襄款客」と二箇所記してゐる。前の方のは

松山既破、擒洪文襄婦、洪感明帝之遇、誓死不屈、日夜蓬頭跣足、罵詈不休、文皇命諸文臣歛勉、洪不答一語、上乃親至洪館、解貂裘与之、徐曰、先生得無冷乎。洪茫然視上、久之嘆曰、真命世之主也。因叩頭請降。上大悦、即日賞賚無算、陳百戲以作賀。諸將皆不悅曰、洪承疇一羈囚、上何待之重也。上曰、吾儕所以櫛風沐雨者、究欲何為。衆曰、欲得中原耳。上笑曰、譬諸行者、君等皆瞽目、今獲一引路者、吾安得不樂也。衆乃服。

とあり、洪承疇が清の太宗の知己に感じて、降服したことを記してゐる。「清太宗實録」によれば、洪承疇が捕へられたのは二月一八日のことで、三月には瀋陽につれて来られ、五月五日、はじめて太宗に謁したやうに見えてゐる。この間にあるひは太宗の幽居訪問があつたのかもしれない。

「清太宗實録」巻六〇では五月五日の項に

上御崇政殿、總督洪承疇跪大清門外請罪、奏曰、臣係明國主帥、將兵十三万來松山、援錦州、曾經數戰、冒犯軍

威、聖駕一至、衆兵敗没、臣坐困於松山城內、糗糧罄絶、人皆相食、城破被擒、自分死、蒙皇上矜憐、不殺而恩養之、今令朝見、臣自知罪重、不敢遽入、所以先陳罪狀、許入与否、候旨定奪。

とあつて、敗軍の將として全く低姿勢であつた様を記す。これにつづく太宗の言は

洪承疇所陳誠是、彼時与我軍交戦各為其主、朕豈介意、朕所以宥爾者、以擊敗十三万兵、与得松錦諸城、皆天也、天道好生、善養人者、斯合天道、故朕推恩活爾、爾但念朕撫育之恩、尽心凶報、従前情罪、悉予寛釈、昔陣前所獲張春、亦曾養之、彼不能為明死節、又不能効力事朕、一無所成而死、爾慎勿如彼之所為也。

といふのであつて、抗戦の罪はゆるすが、天聰五年（一六三二）大凌河城の陥落の時、捕へられて降服せずゐた張春のごとく、清朝に仕へないのは許さないといつてゐる。

「星」の第五二折では

「天子は洪承疇の為に祭壇を十六壇も設けてこのえらい忠臣を弔うた」

とあり、これは明代のことを記した談遷の「国権」には、六月に洪承疇の舎人陳応安らが、松山城内の苦戦の有様を

伝へたあと

家主被執、罵賊不屈、惟西向叩頭、称天王聖明、臣力已竭、死之、従来就義之正、未有如臣家主也

と奏したので、その七日後には洪承疇には贈官があり、また九日めに九壇を設けて祭らせ、七月にもこれを悼まうとしたとの記事が見える。思宗崇禎帝はあるひは洪承疇の敵への降服を知らなかつたのではなからうか。ただし春夫先生は十六壇と記しておいでだが、九壇といふのが事実であらう。

「星」はつづけて

「死を決してゐながらも未だ死ぬことの出来ない洪承疇は清の軍勢を導いて都を援ける為に急いだ」

とあるが、これも史実ではないやうである。「清実録」の前述の条には太宗と洪承疇との問答を記してゐる。すなはち許されて大清門を入り、崇徳殿の前で朝見してから、洪承疇が投降の諸將とともに太宗の左側に座を賜はり、茶をいただいたあと、太宗から問はれた

朕觀爾明主、宗室被俘、置若罔聞、至將帥率兵死戦、或陣前被擒、或勢窮降服、必誅妻子、否則没入為奴者何故、此旧規乎、抑新制乎。

と、崇禎帝の情が薄く、嚴刑主義である理由を問はれると、洪承疇は答へていつた。

昔無此例、今因文臣衆多、台諫紛争、各陳所見、以聞於上、此致如此。

責任は明の皇帝ではなくて、文臣たちの奏言のせいだといつたのである。しかし太宗は

今日之文臣固衆、昔之文臣亦豈少耶、特今君暗臣蔽、故多枉殺、似此死戰被擒、勢蹙降之輩、豈可戮彼妻子、即其身在此敵國、可以財幣贖而得之、亦所當為、何至坐妻子以死從之罪乎、其無辜冤濫亦甚矣

といつて、崇禎帝が暗愚で、文臣どもに徳を蔽はれてゐるのだとした。洪承疇はこの言を聞くと涙を流したといふが、家郷の妻子のことを思つたのであらう。ついで彼は皇上此諭、真至仁之言也

と清の太宗をほめたたへたといふが、清朝でも敗將に対してはその待遇は決してゆるくない。ただ妻子の連坐がないぐらゐのちがひにすぎなかつたのである。

こののちの洪承疇への待遇は或ひは「嘯亭雜錄」の記すがごときであつたかもしれないが、太宗の代を終へるまでは、彼は任を与へられなかつた。

しかし太宗が崩じ、幼帝世祖の代になると、太宗の弟である摂政多爾袞ドルゴンに用ひられた。「清世祖実録」巻四の順治元年（一六四四）四月庚午（一三日）の条には、清の摂政王ドルゴンの軍中にあつた洪承疇がはじめて王に獻言してゐる。かつて討伐に当り、ほとんど滅すになんなんとした流賊李自成が北京を占領し、彼を薊遼總督に任じ、その戦死と聞くと壇を設けて祀つた思宗が北京の煤山で自縊したのは、三月一九日で、この報を聞いた洪承疇はやつと自己の任務を感じたのであらう。清軍に対しても、抗敵の者は必ず殺すが、人民は屠らず、家を焼かず、財物を掠めないことを命令するやう、ドルゴンに進言してゐるのである。この進言は大体まもられ北京の人民は安堵したやうである。

この年六月、洪承疇は太子太保・兵部尚書兼都察院右副都御史に任じられ大学士ともなつた。明の代よりもなほ重職に任じられたのである。ただしこの任命は摂政ドルゴンによるものであつて、「星」の第五三折に

「清の順治帝は洪承疇を見て乱世には珍しいえらい人だと思つた。さまざまに説いて洪承疇を清に仕へるように勧めた。」

とあるのは事実ではない。順治帝はこの時、年齢わづかに六歳（數へ年）で、人才登庸など出来るはずがない。その叔父ドルゴンこそ洪承疇を見ぬいた人なのである。

ともあれ洪承疇が

「日夜この新しい仕事に喜んで勉めた（星第五四折）」

といふのは事実であらう。「星」の同折につづけてしるす人々の非難も事実であらう。しかし「母は私をどこまでも信じてゐてくれた。若し、今日母がゐてくれたならば、私の心持はわかってくれないまでも、私の言ふとほりを信じてくれたらうに。それにしても、よく私に、お前は後に世の中で一番えらい人になる子だと言つた私の母は、お前は後に世の中で一番さびしい人になる子だと何故言はなかつたらう。」

といふ「星」の一節は、春夫の浪漫的な設定で、母は生きてゐて、大学士の母として十分満足してゐたらう。ただ北京のくらしより故郷の方をなつかしく思つて赦許を得ずに故郷に帰つたので、息子はのちに譴責を受けてゐる。ある点で春夫は眞実を語つてゐるのかもしれない。

その後の洪承疇のことは長々と説く必要もなからうが、彼は翌順治二年閏六月には、多くの漢人から選ばれて總督

軍務招撫江南各省地方といふ重要な官に任じられ、軍の兵站ならびに漢人の招撫に當つた。春夫が訳した「揚州十日記」（前掲「佐藤春夫年表」）によれば昭和二年一二月の「中央公論」誌上に発表）の悲劇は、揚州のみならず南方各地で行はれたが、招撫大学士の責任だつたかどうかは「星」にも、史書にも論じられてゐない。

順治四年には彼は明室の魯王に通じたといふ反間の策にもかかつたが、これは事実でないことが明らかにされた。同年また彼の明廷における会試の試験官のむすこで僧函可といふものが南京から故郷へ帰るのを許したが、途中で所持品の検査を受けると、明の福王（弘光帝）の書をもつてゐるのが見つかり、洪承疇は免職すべきだが労績の見るべきものあるといふので、暫くゆるされるとの事件が起つてゐる。彼の身辺は甚だ危険で、その後まもなく江南から北京にかへることになつたが、順治一〇年には再び経略湖広、広東、広西、雲南、貴州等処地方總督軍務兼理糧餉といふ重任に就いて、明の皇族の最後の一人永明王由榔（永曆帝）の討伐を命じられた。その心中はどうであつたらう。順治一四年には病氣を申し立てて一度解任されたが、病氣が癒つたとのことが清朝に聞えて、またもとの任につき、南は

貴州省に赴き、呉三桂らと呼応して永明王をビルマまで追つた。両眼が見えなくなつたとて、軍務を解かれたのは順治一六年一〇月のことであるが、彼が北京に帰り、賞として三等阿達哈番（のち軽車都尉）の爵位を賜つたのは、世祖順治帝が亡くなり、幼帝聖祖康熙帝の位についた順治一八年のことであつた。この爵位は彼とともに南方征伐に當つた、同じくも明朝の臣であつた呉三桂が王爵を賜つたのと比較すれば（王の下で公以下は三等がある）一八級も下である。功に報いるにはあまりに薄く、「星」のいふごとく「世の中で一番えらい人にならせて」下さいと天に祈つた父の願望が、はたしてかなへられたかどうか。爵位はともかく彼は「武臣伝」といふ清朝勅選の書の中に名を連ねられ（呉三桂は「叛臣伝」に乗るが）、春夫はともかく民族主義者たちからは漢奸と考へられてゐる。厦門で本当に「世の中で一番えらい人」と伝へられてゐたのだらうか。わたしには疑問である。ともかく先生の御生存中に洪承疇のことは伺つておくべきだつたとくやまれてならぬ。

以上のやうなことからわたしは「星」の後半にあまり同感しなくなつたが、小説「李鴻章」「女誠扇綺譚」なども

好きであり、中国趣味愛好者としては明らかに春夫の系譜をひいたと思ふ。ただ生半可な歴史知識で「星」を愛せなかつたことを遺憾に思ふ。

「平妖伝」も先生の訳ではじめて読み、魯迅さへも先生と増田渉氏との共訳の岩波文庫「魯迅選集」で読んだ。奥野信太郎教授の序によつて承知した中国の才媛たちの詩の訳をあつめた「車塵集」のもととなつた諸書もわたしはまだ一冊も見てゐない。「からの因縁」は先生の亡くなられたあと増田渉氏によつて集められた論文集で、先生の論文のほか、巻末で増田氏が先生と中国との因縁をくはしく解説されてゐる。これは御存命中の「支那雑記（昭和一六年、大道書房刊）」とともに、わたしがくはしく春夫文学を論ずるならいい材料となる筈であるが、自ら懶斎と号せられたくせ、実はいつも勤勉であり、常に中国を愛された先生の遺業を説くには、わたしはあまりにも懶惰であり、筆も拙い。文学批評の態をなさないこの論文は先生の七回忌に捧げるにも値ひしないことは万々承知した。いつの日にかあらためてくはしく論じたく思ふ。前掲牛山百合子氏の「佐藤春夫年表」によれば、わたしが「佐藤春夫小論」を書いたのは、昭和七年四月の「ユギト」にのせたとある

から大学一年の末のことである。わたしはこの小論でも「武蔵野乙女」を引いて春夫を非難してゐるが、先生はおよみになつたか否か、その後、数年して弟子入りをお願いすると莞爾としておゆるしいただいた。この拙文もお許しただければと冀ふのみである。

(追記) 昭和三二年刊行の「神田博士還暦記念書誌学論集」に「現存最前の閩南語文獻荔鏡記戲文研究序説」を引かれた呉守礼氏の近刊「荔鏡記戲文研究」(台北、東北文化供应社、民国五九年刊)を簡文桂氏に教へていただいた。早速、通読して、「荔鏡伝」(明永楽以後写、清末刊本)と「荔鏡記戲文」(くはしくは「重刊五色潮泉挿科増入詩詞北曲勾欄荔鏡記戲文全集」といひ、これは明の宣徳、正統から成化、弘治年間に成つたもので、嘉靖末重刊本がオクスフォードと天理にあるのみ)、「荔枝記」(清末の光緒本)と神田喜一郎博士蔵の「新刊時興泉潮雅調陳伯卿荔枝記大全」の四種のあることを知つたが、春夫先生が増田渉氏から贈られたのは、その第一の「荔鏡伝」であるらしいと思つた。先生の御遺族にもごぶさたをして御書庫を検する勇氣はないが、四種の内、清末刊本といひ、「荔鏡伝」といふ書名といひ、それに違ひないと思ふ。呉守礼

氏によると一五齣から成つてをり、複刊もされてゐるが、わたしにはこの福建語のまじつた戯曲はよめないが、各齣の題だけ見て大体わかる。黄五娘(春夫先生の王五娘)が井戸に身投げするのは元宵に見せられた豪家の子、林大に婚姻をせまられてのせいで、これは助けられ、そのあと泉州出身の同家のもと鏡磨き陳三が実は「泉州の陳三爹」(爹は敬称)であることを知り、ともに家出して、林大に訴へられ、捕はれ涯州(神田本で崖州とあるのが正しく、いまの海南島)に流される途中、兄の都堂(都御史、副都御史、兪都御史で清代では総督もしくは巡撫の兼官だが、明代では必ずしもさうでなく地方に派遣されて役人の正邪を視察する官である)となつて北上するのに遭つて「めでたし／＼」となることは四書とも皆おなじである。悲劇に作りかへて話した中国人は誰だつたらう。春夫先生の創作だつたかも知れないと思ふ。「李太白」と同じく、全く先生らしいが、「世の中で一番美しい娘」をと恋するもの常で、「荔鏡記」にも当てはまるが、「私の男の子を世の中で一番えらい人に」と祈るのは、十中八九まで春夫先生の創意であつて、春夫文学の一特徴かと思ふ。それが洪承疇でなく、曾國藩とか洪秀全にでもなつてゐれば、時代

錯誤であるが、福建出身の一番えらい人は周知のごとく尤溪生れの朱子学の祖朱熹である。時代が宋代でこれも具合が悪いが、これなら宜しく、時代をさへ変へられたら、わたしなど儒教的教育を受けたものは納得しただらう。先生なつかしさのあまりのとりあげかたがしつこいと思ふ人があるかとこの辺で筆を絶つ。(昭和四五年五月稿、一月改稿)